
チョコレートマギカ

みかなぎあやめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨコレートマジカ

【Nコード】

N6302Y

【作者名】

みかなぎあやめ

【あらすじ】

雛星市、そこで生まれた魔法使いが二人。

一人は血で約束された精霊術の天才、九十九鳥 九。

一人は悲劇の末に生まれた悪魔召喚の天才、蛍 御伽。

彼女らはお互いの存在を知らずに成長し別のタイミングで町を出、同じタイミングにこの町に帰ってきた。

そして彼女たちは同じ高校に通う事となり――――
擦れ違いと魔法と青春と部活動の現代ファンタジー。

プロローグ

黒いマントにとんがり帽子、いかにもテンプレートな魔女の格好だがそれが実は元はドルイドの僧侶の衣装であることを知る者は少ないだろう。

そんな恰好で一人の少女は一人で街中を歩いていた。

少女の名前は九十九鳥^{つくもとりしんの}九、ケルト魔術を使う魔法使いである。彼女は平然と街中を歩きながらある物を探していた。

「ほんと、どこの大馬鹿ですか。重要な触媒落として人に泣きつく馬鹿は」

そう呟くと少女はマントを翻した。

彼女が手にしているのはL字型の細い金属の棒、タウンジングだ。ここは海外のどこかの町、九はここで院最後の仕事をしていた。

「んー見つかりませんね。誰かに拾われたのかもしれませんが」
彼女は誰もいない空中に向かって言った。

そう、誰もいないのだ。人間は。

『ココノ、チガウ、コノヘン、アル。コノヘン、ケハイスル』

九が語りかけていたのは精霊だ。

九は日本人、それもそこそ有名な魔法使いの家の一人娘でありながら古典的なケルト系精霊術を自己流にアレンジをして使っている。

「気配？」

思わず九は聞き返す。

『ウン、ボクラ、ウソ、ダメ。ココノ、ウソ、タマニツク、ケド、ボクラ、ゼツタイツカナイ』

上級の精霊であればもう少しはっきりとした自我があるのだがそれなりの都会、それも緑や川の少ない場所でこれだけの自我がある精霊を呼び出せただけでも彼女の力量がいかに凄いかそれなりに実力がある魔法使いならすぐにわかる。

「じゃあ、生きている。もしくは何らかのエーテル体を宿したもののなんですね」

そう言って九はすぐさま検索対象を変える。

「あ、ありましたー」

それは細い隙間に挟まっていた小さな鍵だった。

「うん、写真と同じです」

九はそれを紙飛行機の形の小型の式神を呼び出しその背に乗せる。

九は式神も一応並程度には使える。

こういう小さい荷物を運ぶ時は式神が便利だ。

空を飛んでいく式神を見ながら九は歩み出した。

これはもしもの世界の物語、科学と魔法その両方が共存し、一般に認知されている世界の物語。

そして過去の魔法使いたちが遺した遺物の物語――――。

第一話 帰って来る少女

4月、桜が咲いている時の事だった。

「やっぱ、自己流じゃダメかー」

そう言っって少年は屋上にごろりと横になった。

「一応文献も読み漁^{とびいわみつる}るだけ読み漁ったんだけどなー」

少年の名前は鳶^{とび}岩^{いわ} 洗^{みつる} 16歳、魔法使いの卵である。

彼の家は代々なぜか科学者で魔法が使えず魔法嫌いの者が多い。

彼はそんな中で精霊が見える事に気が付き独学で魔法嫌いな両親に隠れて精霊術をやるうとしている。

「あーやっぱり先生探すしかないのかー」

幸いこの町、九頭市にはどういう経緯かは知らないが魔法使いがたくさんいる。

「後で探してみるか」

彼は両手を投げ出し空を見た。

そんな彼の横を一体の精霊が通り抜け彼のいる学校の屋上から見える日本家屋へと入っていった。

「むー、やっぱり弟子がとりたいですね」

その日本家屋の表札は九十九鳥。すなわち九の実家だ。

「弟子がいれば助手も出来ますし、私の作った物を受け継がせる事も出来ますしー。うーん」

『オマエ、デシ、ホシイ?』

いきなり聞こえてきた精霊の言葉に九は飛び上がった。

「うわっ、何ですか?」

『コノチカク、マウホツカイノタマゴイル。ソイツウマレタトキカラミテタ。ケド、センセ、マワリ、イナイ。オレラ、ミエテル。サツキ、ジブン、ホンヨンデ、カンガエタ、マハウツカタ』

その言葉に九は目を丸くした。

「本当ですか!」

それが本当ならその少年はかなり精霊に懷かれているはずだ。
その上で独学で精霊術を使うほどの才能も。

「その場所に案内してください」

#

「ふふ、あの子ったら帰っていきなり飛び出していくなんて」
そう言って縁側に座っていた女性は静かに笑う。

彼女は格好こそ着物だが背も高く顔立ちもヨーロッパ系のそれだ。
けれどとても似合っていた。

「やっぱり、性格はあなたに似ているのね」
弱々しく微笑む女性に庭掃除をしていた夫は軽く手を上げるだけですぐに掃除に戻る。

22年と少し前東ヨーロッパの小さな町で偶然会って恋に落ちて
その後たまに会うと言う事を繰り返している間に婚約者が勝手に決
められそれがお互い大好きな相手と知って得に異存も唱えずにその
まま結婚した日からずっと彼女は傍に居た。

この結婚が政略結婚だと彼女は知っている。
それでも大好きな相手なら、それならば構わない。

「でも、才能と顔はお前譲りだな」
ぼそりと夫が言うのを聞き女性、九十九鳥・セシリア・ベネット
は優しく微笑んだ。

「私の娘だものそうに決まっているわ」
少しだけ娘を誇りながら。

「Oh, what on earth I'm involv
ed with a chance to look after
the place during this cute gi
rl that was speaking along wit
h it? If I allow Dattara from
cheating I wonder Kokonotell

ing ill let you punish. Yeah we do.

「訳…あ、そう言えばこの間可愛い女の子と一緒に居た所をたまに見て後を付けたんだけど一体どういう関係？もし、浮気だったら許さないからね。九に言ってお仕置きしてもらおうかしら。うん、そうしよう」

「仕事の依頼人だよ。それ以上でもそれ以下でもないッ！」

慌てて言いつくろう夫にセシリアは冷笑する。

「あら、本当かしら？」

「本当です！だから怒らないでー」

土下座に移行する夫、はっきり言って不甲斐無い。

「それで、お仕事とは？」

ゆっくりと冷たく聞くセシリア。かなり怖い。

「え、えっとヨーロッパで見つかった棺型の遺物だよ。あれの現在の持ち主の特定を任された」

「現在の持ち主の特定？」

遺物とは過去に名の知れた魔法使いや神官、僧侶、そして神々が遺した魔導具の事を指す。

基本として魔法使いならだれでも使えるが物によっては特定の能力や技術、魔法使いとしての血が必要になる。

それなりの歴史を持つこの家にもいくつか蔵に転がしておいてある。

「中身ではなく用があるのは箱だけらしい。代金の前払いで見つかったらそのまま持ち主に渡していいらしい。俺の推測ではたぶんかなりヤバイ物が入っているはずだ。箱よりもその中身の方が高く売れそうなくらいな。形式は恐らく血脈方式。箱もかなりいい物だよ」

「へえ、今度見せて」

セシリアはほんの少しの興味から言った。

「ん、今回は九にやらせてみようと思うんだ。次期当主だからな」

次期当主、九は九十九鳥家の次期当主として育てられた。

精霊使いとしてベネット家の血を受け継ぎセシリア以上の才能を見せ、陰陽師としても並以上の実力を持っている。呪力は並だが効率を上げる事によってかなり大規模な術を片手で使うほどのコントロール力があつた。

「ほんと、なんでこの子なのか」

洒落みたいな名前を付けて大切に育てた子供、自分以上の才能を持つ子。

セシリアはそつとその名前を言うと目を閉じた。

#

「ふいーっ」

息を吐くと九は公園の芝生にごろりと横になった。

「ほんと、どこなんですかー」

『イツモイタ、キヨウ、イナイ、ナンデ？』

「さあ、どうしてでしょう？」

呑気に精霊と会話する九。その姿を葉陰から見つめる姿があつた。

「ふーん、あの子かー」

少女はにやりと笑うとポケットに潜ませた魔導具を掴む。

「さて、はじめちゃえ♪」

そして少女は魔法を発動させた。

『クル』

その声に九は指を鳴らす。

アストラル 幽体界にいる精霊を呪力で受肉し物質化、マテリアライズ そのまま命令を下す。

呼び出したのは風の精霊12体、この程度であればすぐに片せる。

「11体は敵性を確保、条件は周囲に被害を与えず出来る限り静かに気づかれぬよう。残りは我が母に連絡を！」

『ワカタ』

短く返事を返すと精霊は敵性と認定された人物へかかっていく。

その先で上がったのは雷。

「北欧系でもケルトでもありませんね。アジア系の術式です。数で押し切ってください！」

一瞬でどの系統か推測した九はすぐさま数で押し切るよう指示、追加で6体呼ぶ。

「行けっ！」

彼女はそう言うのと精霊たちが向かって行った方向を見る。

相変わらず時々雷が上がっているがそれでも魔法に慣れた周りの人間は全く気にしない。

「ひみゅっ！」

そんな思った以上に若い声が聞こえてきて九は目を丸くした。

「九っ！」

後ろから母親、セシリアの声が聞こえ九は振り返る。

「怪我してない？大丈夫よ、後でシメるからとりあえず九がこの後の処分を気にする必要はないわよ」

笑顔で言うセシリア、九の生存本能がアラートを鳴らす。

「そ、そんな必要ないです。そ、それくらい自分でできますからあ」

「ふふ、こういうのは身を持って叩き込むのよベネット家と九十鳥家に逆らった時点で殺しても構わないんだから」

「殺人は犯罪だよお母さん！」

どうやら殺すつもりだったらしい。

すんでの所で母親が殺人犯と化すのをどうにかやめさせた九は溜息を吐く。

「とりあえずお母さんはいつもやりすぎなんです」

そう言ってぷっくりと頬を膨らませる九を見てセシリアは微笑む。
(あーも可愛い♪)

そんな事を思う母親を余所に九は草むらへ向かう。

草むらには一人の長い栗色の髪を三つ編みにした少女が横たわっていた。

「だあかあらあ、あたしは師匠に言われて忠告に来たんだって。九十九鳥九、あんたはこれから大変な目に遭う。それだけ。何でそれなのに吹っ飛ばされないけないのよ」

不機嫌そうに言う少女に九は苦笑いをこぼす。

「す、すみません。私の勘違いのせいで」

あの後すぐに少女は目を覚まし、自分の状況を早口で九にまくし立ててきた。

それによって九は自分の勘違いに気が付いたのだ。

ちなみに呪力反応があったのはメッセージを直接周りに声を伝えず頭に語りかけると言う魔導具を使おうとしていただけで敵意は全くなかった。

「別にいいわよ、師匠から勘違いで殴られること多いし。それよりもはいこれ」

そう言って少女は彼女に鉄製のプレートを渡す。

「何ですかこれ？呪力は感じないみたいです？」

九はプレートをひっくり返した。

「あ、ミヤコワスレ」

その裏にはやや凹凸のある着色されたレリーフでミヤコワスレが彫ってあった。

「たしか花言葉は『強い意思』でしたっけ。栞と呼ぶには少し小さいですね。上に小さな穴が開いていますからペンダントヘッドか何かでしょうか？」

「ん、あたしも解らない。でもあたしの師匠は鍵だって言ってた」

「鍵、ですか」

鍵と言う言葉に九は首をひねる。

「だとしたら何かの封印を解く物でしょうか」

「知らないわ。あたしはそれをあんたに渡すまでが仕事なの。だ

から帰るわ」

そう言うと少女は椅子から立つ。

「早く帰らないと師匠怖いし、ベネット家のあの銀狼にシバかれる寸前だったのもあるし、それに長居は元からするつもりはなかったから」

少女はぽかんとする九の前で玄関へ出て行く。

「それじゃあね」

戸が閉められ九の姿が見えなくなってから少女は振り向く。

「何やってるんですか？セシリア・銀狼・ベネットさん^{シルバ・ウルフ}」

戸の影には九の母、セシリアが立っていた。

「あの子にアレを渡してどうする気？」

「いえいえ、あたしは師匠に言われただけで何も知らないわよ。それよりもあたしは蔵にしまっただけであるらしい神殺しの刀の方が興味あるけど」

神殺しの刀、その話は日本中にある。

だが九十九鳥家に伝わる物は特別だ。

「空間を切り裂く刀、音斬^{おとぎり}。喪失した魔法と鬼の血肉を持って作られた炎で鍛えられ、神の血を受けて空間を切り裂く能力を手に入れた元から神を殺す目的で作られた最も穢れたともいえる神刀。空間を切り裂くところにあたしは惹かれるけど」

その言葉にセシリアは口ごもる。

「ベネット家もその事を知っていてこの家に稀代の預言者にして精霊使いのあなたをこの家に送り込んだんですよ。あれが悪用されたら大変なもの」

知っている分かっている。そんな事最初から分かっている。もし彼との間に恋愛感情が無かったら暗殺なり何なりをして逃げ出している。

「あの子はいわゆるそのための手駒、白の血筋と黒の血筋を混ぜ最高峰の魔法使いを作り出そうとしたその過程に発生した本当の意味での化け物、なりそこない、精霊たちのいとし子。だから私たち

試すの、この町にいる若き魔法使いたちを」

「狂っているわ」

その言葉を聞くか聞かないか、少女の姿は掻き消えた。

#

「ただいま」

黒髪の少女は誰もいない家に入り息を整える。

この家に入るのは5年ぶりだ。

『ふん、何も変わらん』

自分の中に喚よんでいる悪魔の声を聞き少女は眉根を寄せた。

「わかっていたくせに」

『当然だ』

この悪魔とは契約による主従関係と言うよりもむしろ共生関係と呼んだ方が丁度いい。

生き延びる代わりに彼女の体に宿り世界中を出来る限り普通の出来る限り追われない方法で巡ると言う契約を少女は10歳の時に交わした。

それでも悪魔は彼女に世界の行きたいところ、見たいものを告げるだけでそれがすでに喪ロストしてわれている物であったり、観覧や立ち入りが禁止されているところだったりすると簡単にあきらめ彼女にある程度の自由も与えたりもした。

悪魔も何百年何千年と人間からの顔色伺いには飽き飽きしていたところであり自分の立場を無視して毒舌で話して来たり、悪魔が教えた知識に対しそれを噛み砕き自分の見解との相違点を堂々と話してくる少女はとても新鮮に感じとても興味深く感じていた。

ふと話したことから少女は全てを汲み取り、悪魔は彼女の見解から自分の知らない人間の一面を知った。

ふと気が付くとこの少女と悪魔は完全に共生し合っていた。

「どうして今更」

『少しばかりここでこれから起きる事に興味が湧いてな。お前は別に好きに行動して構わない、知識と力が必要になった時はいつでも言え貸してやる。私はお前がそれをどうするか中から高みの見物をする^{ソサエテイ}と決めた。怪しまれないために魔法協会経由で院にこの町にある高校への入学手続きをしたのだそれくらいはかまわんだろう』

少女の表向きの保護者はこの家の隣に住む紅^{くれない} 琴^{こと}と言う女性でその女性はたまにどこにいるか手紙を寄越すようにと約束させただけで特に干渉はしてこない。

その彼女がせっかく日本のこの町に帰って来るなら高校に通った方がいいと薦め少女は元から目立たないためしようと決めていたので入学手続を彼女に一人でした貰ったのだ。

「あとで琴さんに帰ってきたこと言わないと」

『礼もせねばな』

妙なところで律儀な悪魔である。

「とりあえず行かないと」

少女は小さく言う^{ほたる}と鞆^{おとぎ}をホコリをかぶったソファの上に投げリビングを出た。

少女の名前は蛸^{ほたる} 御伽^{おとぎ}、今生きている中で最も力のある悪魔使いにして魔王と契約を交わした背信者。

そして最も邪悪な事件の生贄にされた哀しい魔法使い――――

第二話 史上最強と魔王と少女たち

暗い、少女はそう思って顔を上げた。

彼女の足元には二つの骸と粉々になって何が何だかわからない腐った肉片、そして血で書かれた不気味極まりない魔法陣。

知識が囁く、これは真に呪われた物だと。

本能が囁く、これは自分が使うべきだと。

「お、かあさん」

血の気が引いた唇からそんな言葉が漏れた。

自分の腹は刺されている。もうすぐ少女は死ぬだろう。

「死にたくない」

この部屋に満ちる気配に少女は言った。

「まだ、死にたくない」

概念など分らない、けれど少女にはすべて理解できた。

生贄として選ばれた両親。

狂った悪魔信仰者。

そして不足分を補うためすぐに殺されず腹を刺されただけで今はまだ息がある自分。

そして悪魔信仰者が自らの内に喚んだが耐え切れず解き放たれた気配。

『叶えてやろうか、生きたいと言う望みを』

少女はその声に黙って頷いた。

気配が少女と言う肉体イレモに満ちる————

それと同時に御伽は目を覚ました。

「・・・あの時の夢？」

ここは彼女の両親の寝室。彼女はそのベットを借り昨日は寝た。この家に置いてあった彼女の持ち物は全て燃やして処分したので今、この家には彼女の両親の持ち物しかない。

「もう見ないと思ってたのに」

御伽は状況を整理する。

あの日、両親は死んだ。

血は一滴残らずあの禍々しい魔法陣を書くインクとして使われて。一方でわずかに足りない不足分を補うただそれだけの目的で御伽は腹を刺され死にかけていた。

生きたい、ただそれだけで少女は魔王の肉体イレモノになった。

そして魔王に言われるまま世界を放浪し昨日、この町に帰ってきた。

今、魔法協会ソサエティが決めたルールで悪魔祓いは有害、もしくは犯罪を起こした者に仕える悪魔を除いて祓う事を禁じられている。

そのおかげで少々行動に気を付けるだけで狩られたりはしなかった。

(明らかに琴ことさんの影響もあるだろうけど)

お隣の家に住む紅 琴は元悪魔祓いで上司と反りが合わないという理由で元居た組織を抜けこの町で九十九鳥家の元、怪異や幽霊などを祓って生計を立てている。

ヨーロッパに居たころにはかなり凄かったらしく武勇伝が知り合いと言うだけで耳にタコができるほど聞かされ、果ては同情の声を悪魔祓いから掛けられる事さえあった。

「ねえ、琴さんに戦いを挑んで勝てる気がする？」

『・・・全くしない』

これは数少ない魔王との共通の考えの一つだ。

絶対一生かかっても敵わない、むしろ敵に回したくない。

『あの、ハリセンは痛かった』

悪魔を憑依させた、それだけでベチベチバシバシとハリセン、それもきちんと富士の霊水で育てられた楮こうぞをさらに富士の霊水で漉き、さらに本物の聖水で清めを退魔処理を済ませた特注品で叩いてきたことを思い出し御伽の頭はヒリヒリした。

ふつう、御伽の感覚は御伽が表に出ている時、中にいる魔王には伝わらないものなのだが御伽が表に出ていたにも関わらずかなり痛

かったらしい。

———本当に最強だわ。

その言葉で思考を打ち切りになると今日することを思い出す。

「今日、掃除と片付け、あらかじめ発注しておいた制服と教科書の受け取りしないと。やることが山積みね」

『そうだな』

彼女はそっと立ち上がると鞆を開け着替えを出し簡単に着替える。悪魔使いと言っても服の趣味はごく一般的な少女と変わりはなくどちらかと言うと御伽は地味目の服装が好きだ。

彼女の着替えた後の服装はジーンズパンツに海外で買った長袖のシャツの上からジーンズ地のベストを羽織っていてこれだけで如何に地味かよくわかる。

「さて、始めましょう」

小さく彼女は言うと自分の白魚のように細い指を噛み、傷つける。すぐに湧いてくる血、痛みと生理的嫌悪感に眉一つ動かさず御伽は自らの血で陣を書く。

「来い」

彼女はただそう言うだけでいい、後は彼女の血と自身の力を使って彼女の中にいる悪魔———魔王がなんとでもしてくれる。

「お呼びですか？我が主と契約せし者」

ひどくしわがれた声が聞こえた。

呼び出された悪魔はガミジン、地獄の大侯爵でありどんな質問にも明確に答え召喚者に対しては忠実そのもので性格も温和で親切と言う比較的扱いやすい炎色の衣をまとった美しい長い髪を持つ女悪魔だ。

とは言えソロモンの七二将の一人に数えられるため普通の人間に召喚できるわけではないが。

「この家の掃除と必要になる家電製品を買ってきて、あと魔法による結界やその他諸々魔学的設備のチェック、それとこの町にいる私と同世代の有力な魔法使いのリストの制作を頼めるかしら。掃除

道具と家電製品のお金はナイトテーブルの上にある財布から適当な額を抜いて頂戴。たしか40万入ってたっけ全部使って構わないから」

ちなみに彼女の財布の中のお金は全て悪魔信仰者から貰った物であり魔王の助言通り一応貰って必要に応じて使っている。

「了解しました。まだ使えそうな物はどうしましょうか？」

「捨てて、この家の物に愛着は特にないから」

「かしこまりました」

次の瞬間ガミジンの姿が消える。恐らく指示を実行しているのだろう。

『ふん、それならばインプを喚んでいればいい物を』

「琴さんと一緒に一日過ごす気なら構わないけど」

『それは・・・』

魔王はそれっきり口をつぐんだ。

#

「はい、制服よー」

手渡された制服と指定のジャージを手にはウキウキ顔で九は町を歩いていった。

「ふっふーん、明日から高校生です。もう見た目高校生とか言われたりしませんからね」

『ミタメコウコウセイ？』

「もう、楽しい気分には水を差さないでください」

九は年齢の割に身長が高く小学生の時は中学生、中学生になってからは高校生と間違われている。

それでもここ最近では身長伸びも止まり身体つきがややふっくらとしてきた。

「でも、これで馬鹿にされないのですねうれしいです」

楽しげに笑うその横を不穏な気配が通り過ぎた。

「え？」

次の瞬間にはその気配は消えた。

「お仕事中の悪魔でしょうか？」

あの気配はどう考えたって悪魔だ。

だがその気配は九が感じた事のあるどの悪魔よりも怖い感じがした。

（あとでお母さんあたりに聞いてみましょう）

そうすれば分かるはずだ、そう九は自分に言い聞かせ道を歩き出した。

「ふにゅっ」

ドンと九は思いっきり誰かとぶつかり額を抑える。

「あいたたた。大丈夫？」

先に相手が起き上がり九に手を差し出す。

「これくらいヘーキです」

こけるくらいなら九には日常茶飯事だ。

「そうですか、あ、道を聞きたいんですけど少しいいですか？」

「それくらい構いませんよ」

「えっと、じゃあこの辺に紅 琴さんって言う名前の人が住んでいてその人に荷物を運ぶように言われてて家がどこにあるか知りませんか？私この町に生まれてこの町に育ったんですがこの辺に関しては問いが全くなくて迷子になっちゃってたんです」

紅 琴、くれないこと。その名前を九は嫌と言うほど知っている。最強伝説の持ち主だからだ。

「あ、はい知ってますよ。ここの角を曲がって——ええいめんどくさいですね」

そう言って九は指を鳴らす。

呼び出したのは風の精霊だ。

小さな少女の形をとる薄緑色に発光する風の精霊に九は簡単な指示を出すと少女の方を向く。

「この子について行ってあげてください。そうすれば付きますよ」

「はい、わざわざありがとうございます」
そうぺこりと頭を下げ少女はとたととと精霊の後をついていく。
その姿を認めてから九は再び歩き出した。

#

少女が琴の家へと向かい始めたその頃御伽は九が制服を受け取った店とは違う店で制服を受け取ったのち食材を買いに大型スーパーへ来ていた。

「フライパンは・・・ガミジン買って来るか怪しいから一応買っておこう」

そんなことを言いつつも次々とフライパン、お玉、鍋等の調理器具を食材と共にドサドサと入れていく御伽、その小学生並に低身長な姿を見て店員が駆け寄ってくる。

「ねえ、お嬢さん親御さんは？」

にこやかに言うパートの女性を御伽はにらむ。

「私はそんなことを言われる年齢じゃないわ。それにあなたには関係がないでしょ」

その剣呑とした空気に女性は無意識に一步下がる。

「わかればいいわ」

そう言う御伽は軽やかに歩き出す。

『アレでいいのか？』

「構わないわ、慣れてるから」

もう、それしかないのだ。恐れられ、恐怖と憎しみの対象となる以外の道は。

「諦めたから」

それしか許されていない。いや、もう許されないのだ。

御伽はそれで満足している。

だから――――

「あ、御伽めっけ」

そんな激しく聞き覚えがある声が聞こえ御伽はピタリと動きを止める。

「探したわよ、あんたなんで私に一声かけず出掛けんの？」

そこには史上最強の独身、紅 琴がいた。

「琴さん、どうしてここが？」

「ああ、自炊できるからスーパーに行つてなんか買うなと思つて来てみたら案の定いたね」

行動を読まれていたと言う事実には御伽はショックを受けた。

「それで何か用ですか？」

「ん、この町で仕事やってみないかいと言うお誘いが九十九鳥家から来てるよん」

そう言つて琴は御伽に封筒を渡す。

御伽はその場で封筒を開けた。

#

「え、ええっ」

父親、九十九鳥 つくもどり たきすけ 滝助から言われたことに九は驚いた。

「私が遺物の鑑定と持ち主さがしするんですか！？」

「そうだ、そろそろこう言う事を体験しておいた方がいいと思つてな」

滝助はそう言うときセシリアの方を見る。

有名な音楽と盲人の聖人と同じ名前の妻は怖い顔で口角を無理矢理持ち上げ切り裂いたような笑みを浮かべるだけだ。

(こ、怖ええ)

キレると手が付かなくなるので話を進める。

「遺物は———いつもの俺の作業室に置いてあるから後で鍵渡すな。必要になりそうな機材は一緒に置いてあるから追加で物が必要になったらいつでも言ってくれ」

それだけ言うときセシリアと滝助は茶室から出て行つた。

（うう、どうすればいいんでしょう？）

これはピンチだ。

ソサエティ魔法協会運営の個性的な魔法使いのための学校、『院』を九は飛^スび級^{キップ}で卒業したのだが物の鑑定については常に赤点、補修の常連だった。これが無ければ1年前にはこの日本に帰ってきていたはずだ。

（いろんな意味で終わりましたあ）

始まる前からお手上げ状態の九、だがこの問題があっけなく終わる事をまだ知らない。

第三話 それぞれの朝

翌日、朝早く目を覚ました洗は目をこすりつつ目覚ましを止めた。

「朝かよ」

昨日は全然眠れなかった。変な気配を感じたせいだと自分を言い聞かせる。

昨日、街中をずいぶん前から買いたいと思っていた本を買った帰りに妙な気配とすれ違ったのだ。

小悪魔などは比べ物にならない気配に濃く、邪悪な気配に当てられふらふらと寮に逃げ帰った後、そのままろくな食事もとらず朝が来た。

「とりあえず朝飯だけでも食わねえと」

ふらふらの体でキッチンへ入り、水を一杯飲む。

この学校、私立明鳥高校あけどりは全国からトップクラスの天才鬼才を集めた高校でいろんな意味で紙一重な人材が集まるこの町に居を構える世界でも遺品鑑定で有名な魔法使いの一家、九十九鳥家の運営する学校だ。

もちろん、人として超えてはいけない一線も楽々超える人間も多い。

洗はここに科学部入部を前提とした特待入学でこの学校に入学した。

（でも、まさか顧問があんな先生だったとは）

顧問の先生は昔イタリアで何かやっていた錬金術師の日本人女性あかがねで赤銅色に髪を染め、常に死んだ魚のような目をしている。

それ以前に洗一人しか部員がないと言うのもどうかしていると思うが。

だが、暇を見つけては、洗に錬金術を教えてくれている分、洗には有難い。

「とにかく早いところ行かねえと」

寮の食事は洗にとっては舌が合わない上、高い。洗は適当にスクランブルエッグを作りマヨネーズ、ハムでサンドイッチにして口に放り込み水を飲んで手早く着替えると鞆片手に科学部の部室へ急いだ。

「遅い」

第2理科室の女王、新戸部にくとべえ 紗枝はそう言って口に咥えた飴の棒を指先で弄る。

「新戸部先生、何がしたいんですか」

昨日の夜、いきなりケータイのメールで7時までに部室に来いと告げられたため洗は何をされるかわからない恐怖に怯える。

（また、試作品の薬とか飲まされんのか？）

そう思うと背筋をうすら寒い物が駆け抜ける。

「ん、今日集めたのは新入部員についての事だ。三人、適当に捕まえてこい。質は問わんが出来れば魔法使いがいい。わかったな」
何をされるかと身構えていたが頼まれたのは意外な事に部員集めだった。

「気になってたんですけど後ろにいるの誰？」

この部屋に入った時から洗は何かの視線を感じていた。

それは新戸部の後ろのドアから来ている気がした。

「最初から気が付いていたならそうと言えば良いのではないですか」

そう言ってドアの陰から一人の女性が出てきた。

腰まで伸ばしポニーテールにした髪は赤毛と言うよりも血をそのまま固めたかのような鮮烈な赤、そして瞳は明るく澄んだ緑だ。

「初めまして、鳶岩洗さん。武宮たけみや 星奈ほしなと申します。今学期から一年の物理の授業を担当する教師です。以後お見知り置きを」

白衣を翻しつつ礼儀正しく礼をする里弥に洗はなぜか違和感を感じた。

「あ、ああ」

『コレヒトチガウ』

「え？」

そんな声を精霊から囁かれ洗は思わず声を漏らした。

「ん、精霊からなんか言われたのか？」

ちなみに新戸部はすでにいろいろな出来事に巻き込まれ洗の精霊と会話し、その姿を見る能力を知っている。

「いや、天野先生が人じゃないって言って来たから・・・」

その言葉に少し新戸部はポカンとし、その間に里弥が口を開く。

「消しておきましょうか？この世界からチリ一つ残さず」

物騒な事を口走る里弥に洗は冷や汗を流す。

「いや、いいだろ消さなくても。どうせこいつもこの町に住む以上関わり合いになるだろうし」

そう言ってくくと笑う新戸部は椅子から立ち洗の方を見た。

「さて、これから言う事は口外するなよ。事情を知っている人間以外にはな。約束を破ったらホムンクルスの原材料にしてやる。天野里弥は精霊が言っている通り人間じゃない、戦闘人形バトルドールと呼ばれる魔法使い殺しのための自立して動く人形型の魔導具だよ」

少しの空白、その後洗は口を開く。

「それで、何なんですか？」

それだけでは動じない自分がいる事を未恐ろしく思いつつ洗は思いうす。

自分で授業をやるのがめんどくさいと言う理由で式神に授業を代行させたり、副業云々で弟子に授業を無理やりやらせたりと言う事が何度かあった。

だから人形が授業を行っているくらいではたいして驚かない上、至極しごく当然な気すらする。

「予想以上にリアクションが薄いか、まあ理解早い方がいいな。なあお前こじく蠱毒こじくって知ってるか？」

洗はすぐに動物愛護団体から非難を浴びる魔法の事を思い出した。壺や瓶かめの中に毒虫や蜘蛛、爬虫類、両生類、小動物を入れ餌を使つて共食いをさせ淘汰の果てに残った一匹を蠱こと呼び使役する歴史

上何度も禁呪に指定された魔法の事で現代では禁止されている。ほかの呼び名には蠱術^{こじゅつ}、巫蠱^{いぐ}などがある生贄^{せいじ}をささげるタイプの魔法だ。

「それがなんなんですか？」

「ん、それとにたよーな事をやろうとしている馬鹿な輩^{やから}いるようなんだよ。理由は不明、目的は本当の意味で戦闘人形^{バトルドール}を使いこなす人間を見つける事。昔々にも同じことをやって海外の大都市がいくつか吹っ飛んだらしい。私は上——九十九鳥家から命令を受けてこの武宮星奈、正式な名称はフラウシリーズの十六番目^{シックスティーン}、アマリスと契約した。わかりやすく言えば参加資格だけをポイと渡され、街をふっ飛ばさないよう気を付けてくれれば後は適当に暴れてくれと言われたようなものだ。他に質問は」

そう聞かれ、洸は少し考えてから言った。

「あの、武宮星奈って先生が考えたんですか？」

苗字に目をつむれば極々一般的な名前だが、新戸部の事、あまり考えて付けていないと思ったからである。

「ああ、それが変わったことに興味を持つな名前の由来は——新戸部はくると右を向き、黒板に慣れた手つきで何か文字を書いていく。

——アマリスはヒッペアストラム属と言う植物の仲間でな語源はギリシャ語の騎士と言う意味の言葉と星と言う意味の言葉で日本で言う騎士と言ったら武士の事だろ、そこから武宮、星奈は字面の通りだ」

黒板には流れるような筆記体で『Hippastrum』とその下に『hippeos（騎士）』＋『astrom（星）』と書いてありなんとなく、よく考えてから付けた物だと洸は思った。

「とは言え考えたのはセシリアの野郎だがな」

その言葉にやっぱりと洸は思うと席を立つ。

「それじゃ先生、俺行かないとヤバいんで失礼します」

洸は入学式で新入生の引率をやることになっているため、そろそ

る教室に荷物を置き、集合場所へ向かわないと怒られる。

「ああ、そうか。くれぐれもこいつの事はアマリリスって呼ぶなよー」

「わかってますって」

そう言うのと洗は荷物を手に第2理科室を後にした。

「さーて、仕事するかね。アマリリス、今日の分の教師としての仕事が終わる次第風潰しに探せ。始末はしなくていい。私は少し気になる事があるから別行動で久々にセシリアと組んで調べてみるからそこんところよろしく」

「畏まりました紗枝様」

腰を折り綺麗な礼をするとアマリリス——武宮星奈は第2理科室から出て行った。

#

「そう」

短く言うのと御伽はガミジンの報告を頭の中でまとめる。

「帰っていいわ」

その言葉にガミジンの姿が一瞬で消えた。

『これでいいのか？』

「ええ」

自分で入れた紅茶を飲むと御伽は笑う。

「これで必要最小限の情報は手に入った。これで私も参加できる」
これからこの町では大きな争いが起きる。その予兆を伝手で知った御伽は魔王の言うままにこの町へ来た。

もちろん自分の過去との折り合いをつけるためにもちようどよかったこともある。

「でも、その前に一つ決着付けないとね」

そう言うって御伽はブレザーの上を羽織った。

『それで、受けるのか。九十九鳥家からの仕事を』

「もちろん」

自分に拒否権は存在しない。むしろ都合がよかった。

「私はそれで別にかまわないから」

今日帰ってきたらある人間を消す。

その事に御伽は躊躇^{ためら}いを感じない。

そんな感情はずっと昔に捨てた。自分が死にかけ、魔王と契約を結んだ時から。

「私はもう何も思わない方がいい人間だから」

御伽は鞆を手にかから出る。

一つの決意を胸に。

#

「ひみゅー」

九は伸びていた。ベットの上で。

「ほら、起きて学校に行きなさいっ」

セシリアがガクガクと九の体をゆする。

その蒼の目で強く睨もうがグーで殴ろうが軽い電気ショックを精霊術で与えようが九は唸るばかりで目を覚まさない。

これは九の悪い癖で一度寝ると何をされようが目を覚まさないのだ。

「ほんと、この子どうやったら目が覚めるのかしら？」

いつもは滝助が起こしていたがセシリアにはその方法がさっぱりわからない。

「ペンライトで目蓋越しに目を照らしてやるといい」

後ろからいきなり囁かれセシリアはびくりとする。

「あ、あなた!？」

振り返ると仕事で朝帰りの滝助がいた。

「そこまで驚くことはないだろ」

そう言ってにへらと滝助は笑いペンライトをポケットから取り出

す。

カチカチと付くかどうか確かめると九の顔の方に持っていく。
小さなボタンを押すと青白い光が九の顔を照らす。

「ん、うー」

途端、九の動きが眠っている人間のそれから目覚めかけの人間の動きに代わる。

数分後、九は目を覚ました。

「お母さんもお父さんもお早うです」

「ええ、九お早う。今何時かしら？」

セシリアのその問いに少しの間九は考える。

「・・・七時四十五分——遅刻ですっ！」

九は慌てて飛び起きると両親を追いつ出し部屋の中で素早く着替えをする。

パジャマを脱ぎ捨て学校指定の黒いシャツを着るとその上から赤いチェックのスカートを穿き、真っ赤なブレザーを羽織る。

赤と黒のごく普通の学校ではありえない取り合わせの制服だがなぜかはわかりきっていた。

それは————単なる理事^{セシリア}長の義理の娘、つまり母の好みである。

（だからってこの色合いは無いです・・・）

そんなことを思いながら九は鞆片手に部屋を出て一階へ移る。

九十九鳥家は元は純日本建築だったが去年白アリにうっかりやられた離れ————と言ってもごく普通の家ほどのサイズがある————を取潰し、見た目が和風の一軒家を九が小学5年生の時、つまり九がこの家を出る2年前に建てたのだ。

とは言え、本邸は今も九の祖父や祖母が暮らしているため人が毎日出入りしきちんと手入れされている。

九は一階に作られた渡り廊下から本邸に入るとそのまま居間のふすまを開けた。

「おや、九お早う」

そう言って穏やかにほほ笑む祖父、源蔵に九は挨拶を返すと席に

付き、朝食を優雅に、そしてそこそのスピードで平らげる。

「行ってきます」

食器を半ば投げ込むようにシンクに入れると大慌てで鞆をひっつかみ丸は家を飛び出した。

「急がないと遅刻ですー」

丸はそんなことを大声で言いながら走る。全力で。

第四話 月夜、静かに

「百編死んで来い！」

見ず知らずの少女に怒鳴られ洗は身を固くした。

もちろんこうなったのには理由があり、洗にロリコン特殊な性癖&ドMが
ある訳ではない。

彼女を一言で表現するなら白い薔薇だろう。

気高く、それでいて清純。そして——激しい棘がある。

「何様のつもり？ あんた、いい加減にしなさいよ」

それでいて見た目が小学5年生の高校一年生とは笑わせてくれる。

「もう一度言うわ、百編死んで来いこのウスノロ！」

どうしてこうなったのか、それは少し前にさかのぼる。

洗は新入生の引率をやるためやたら広い校内を走りまわされていた。

魔法科から普通科、挙句の果てには畜産科、薬品科、工業科まで
あるこの学校のモットーは才能ある者にも、才能なき者にも等しく
学びの戸を開くという物のため恐ろしく敷地が広いのだ。

だからこそあのような規格外の教師がいるのだろうと洗は心の中
で納得しつつ自分が置かれている状況を整理する。

（とりあえず俺がこれからすべきことは魔法科の新入生の引率、
ただその一点のみ！くそ、敷地広すぎて息が持たねえ！）

いろいろな事情があり体力が人よりはる洗だったがその息は途
切れ途切れ、それは彼が既に150メートル以上走っていることを
示していた。

と、彼の視界に一人の少女が入ってきた。

そしてほんの親切心から迷子？と聞いたらこの様だ。

「ねえ」

「？」

「魔法科の校舎って何処？」

少女がやや上目遣いで聞いてきて洸は頭を抱えなくなった。

「やっぱり迷子じゃないか・・・」

思わずそう呟いたら少女の本気の蹴りが洸に飛んできた。避け切れずまともに食らいぶっ倒れる洸。

「あ、やっちゃった」

そして少女は自分のミスに頭を抱えた。

#

きーンこーんかんこーんと言う妙に間の抜けたチャイムの音に洸は目を覚ました。

何か柔らかいものが頭の後ろに当たっている。

「・・・」

そして激しく目が合った。

「き、気絶したあんたが悪いんだからね!」

顔を真っ赤にして怒鳴る少女、どうやらツンデレ属性らしいと無駄なことを考えつつ洸は体を起こす。

「あ」

そして洸は気がついた。完全に日が昇り切り時刻は昼過ぎになっていたことに。

「何か悪いな、介抱してくれて」

「・・・別に、蹴っ飛ばした私が悪いんだし」

何やらしよげ返っている少女、洸はこういう空気が嫌いだ。

「こりゃ入学式サボりだな。と言うよりももう終わってるだろ。よし、これから飯食いに行こう」

「へ?」

思わず固まる少女。

「ほら、奢ってやるから立てよ」

「え、ちょっ!」

少女の手をつかみ強引に立たせると洸は歩き始めた。

「ちょっとあんた私が誰か知って——」

「そんなもん知るか」

きっぱりと言う洗に少女はもごもごと口籠くちごもった。

「そう言えばお前の名前は？俺、鳶岩洗、ここの2年だ」

少し、戸惑ってから少女は答えた。

「私の名前は蛍御伽よ。一年だから後輩になるわね」

やたら態度がでかい後輩だと思いつつその手を洗はそつと引く。
入るのは適当なファミリーストランでいいだろう、家から科学雑誌を輸入して読むと言って毎月かなり多めに仕送りをもらっているためよほどの大食いではなかったら大丈夫だろうと考えながら下心なしで洗は御伽の手を引く。

それが現在最強の悪魔使いの手だとは最後まで気付かなかった。

#

生徒が一人来なかった。

そう思いながら武宮星奈はカタカタとパソコンのキーボードを打っていた。

ここに来る一か月前まではある魔法使いの事務所で経理を任されていたためパソコンの扱いには慣れている。

今作っているのは明日のオリエンテーションで使用するプリントの作成だ。あと10分はあれば終わるなと思うと星奈は軽いため息をついた。

自分は人形であることを星奈はきちんと自覚している。

それでも元来作られた目的では五感と感情が必要であった。だから星奈は五感と感情を持ち合わせている。

それでも主人の命令に対しては絶対服従する以外になく体のあちこちには魔法兵器仕掛けが埋め込まれているためその点は何ら人形と変わらない。

（明日は来てくれるでしょうか？）

星奈はプリントのデータを完成させるとパソコンを慣れて手つきでシャットダウンさせ、忘れ物がないかを確認すると職員室から出た。

あくまで外向きは普通の教師だ。

だからそう不審な動きは出来ない。

靴を履き替えると星奈は学校の敷地を出た。

細い裏路地に彼女の姿が入ったとき、彼女の姿が消えた。

#

そっと空に手を伸ばし小熊座を指でなぞると御伽はため息をついた。

自分のことを全く知らない少年と会話をして食事を食べて、小さいころに住んでいた町が少しだけ新鮮に見えた気がした。

（何考えたんだ私！）

気がつくと顔が火照っていた。

あの少年は自分は錬金術師の弟子なのだと冗談交じりに話したことを御伽は思い出す。

おそらく自分に関することを知るのは時間の問題なのだろう、そう思うと少し哀しくあり、少し嬉しくあった。

「ばーか」

なんとなくそう呟いて御伽は溜息をこぼした。

「・・・科学部か」

彼から彼の所属している部活の話聞いたとき御伽は必ず部活に入部しないといけない校則を思い出した。

あの緩い部活なら幽霊部員が一人ぐらいいてもかまわないだろうと御伽は思い、空に手をかざす。

冷たい月が笑うように昇っていた。

その中を何かの影がよぎったような気がして御伽は目を凝らす。

のんびりと、九は空を飛んでいた。

もちろん、この街には九十九鳥家の手によって無数の対空砲火や対空術式が仕掛けられており普通に魔法で飛ばば魔力を3秒で感知されてアウトである。そう、普通に飛ばば。

九の跨る箒には小さな和紙のシールが貼られている。

これはいわば味方であるという証でこれさえ付けていれば対空砲火を雨霰と喰らわずに済むという魔法が掛けられている。
あめあられ

彼女は上空で魔力の探知をやっていた。

「南から強い反応、これは明らかに違いますね。魔力性質が異なりますし。もっと北のほうでしょうか？」

そう呟き九は箒を駆る。さらに山のほうへ向けて。

その姿を複数の人間が見ていたのだが今の九には知る由もなかった。

こうして夜は更けていく、一つの災いの種とこれから先ずつと関わり合いになっていく魔法使いと共に。

そして、翌朝すべてがつながり始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6302y/>

チョコレートマギカ

2011年12月5日16時45分発行